

■ダイアログ・イン・ザ・ダーク

「Dialog in the Dark」は、日常生活のさまざまな環境を織り込んだまっくらな空間を、聴覚や触覚など視覚以外の感覚を使って体験する、ワークショップ形式の展覧会です。1989年ドイツ・ハイネッケ博士のアイデアで生まれ、その後、ヨーロッパ中心に70都市で開催、すでに100万人が体験しています。

参加者は、くらの展示室を普段どおりに行動することは、不可能です。そこで、目の不自由な方に案内してもらいます。案内の人の声に導かれながら、視覚以外の感覚に集中していくと、次第にそれらの感覚が豊かになり、それまで気がつかなかった世界と出会いはじめます。森を感じ、小川のせせらぎに耳を傾け、バーでドリンクを深く味わいながら、お互いの感想を交換することで、これまでとはすこしちがう、新しい関係が生まれるきっかけをつくります。

(開催趣旨文より)

DID、3つのテーマ

1. 視覚障害者と健常者が一緒に活動する機会を設けること
2. 視覚を遮断することによって五感を再認識する（活性化させる）こと
3. この展示ツアーを何人かと一緒に体験することにより、参加者同士の間、これまででない「対話」を生み出すこと

第4回「Dialog in the Dark in 仙台」

2001年10月21～31日於せんだいメディアテーク

実質参加者数：592名。本江も参加。

集合。白杖の持ち方。自己紹介。声を覚える。

森：木の匂い、落ち葉を踏む、幹や枝の手触り、小川を渡る。

街：信号の音、段差、クラクション、クルマ

海：陸橋をこえる。砂浜、ブランコ、古いボート、宝探し

テーブル：様々な感触のオブジェ、音が出るおもちゃ

バー：席に着く、飲み物を渡す、ワインを飲む、胃袋の形

絵を描きながら対話。よそよそしく別れる。

動くとも環境のことがわかる。じっとしていると何もわからない。

障害者体験以上に、感覚の解放の問題。マルチメディア？

■ドッベル・アイ Dobelle Eye

ウィリアム・ドッベルによる人工視覚の研究成果。1999年公開。

1968年に研究開始。1970-72年、ヒトの脳内に電極を設置。

開発当時は800kgのコンピュータが必要だった。今はモバイルパソコンで可能。

CCDカメラ→デジタル化→コンピュータ→大脳皮質視覚野にパルス

色は分からない。先天性視覚障害で視覚野が未発達の場合は使えない。

事例にあるジェリー氏は22歳の時に外傷で片目を失明。36歳のとき第二の外傷で全盲となる。1978年(41歳)に手術を受け、20年以上感染などの問題なく暮らしている。地下鉄にも乗れる。

イエンス氏は17歳の時線路際での事故で左目を失明、3年後スノーモービルの修理中に金属片が右目に入り

失明。

2002年4月現在、システムは市販され、6か国で8名の患者がインプラント手術を受けている。将来的には手術料込みでUSD \$50,000。

「体を動かして帽子を取り、人形にかぶせる。」

→ 視覚と身体動作の同調＝見えている！

ソースはカメラでなくてもいい。

デジタルな視覚 vs オプティカルな視覚

ゲシュタルト=感覚要素の総和以上のもの、総和とは異なるもの

e.g. 個々の音に対するメロディ

中枢-推論説（感覚器官→知覚） vs ファイ現象（仮現運動：点滅する電球が移動してみえる）

要素刺激とゲシュタルトは同レベルにある。

視覚その他の人工眼研究

カメラからの信号の受信部の取り付け場所で3タイプ

網膜／視神経／大脳視覚野

脳に近いほど適用可能性は広い、実装が困難。

イェンス・ナウマンさんの事例

NHKスペシャル「立花隆 ヒトはどこへ行くのか」2005年11月5日放送。

8m50sごろから14m33sまで

TBSニュースより

■ジェイムズ・J・ギブソン

航空母艦に着艦する戦闘機パイロットの視覚の研究。

驚異的な「あたりまえの視覚」 vs 視覚心理学実験室での貧しい視覚

地面の発見。Visual World。肌理（テクスチャー）の勾配による奥行き知覚。

環境の中を動き回る知覚者の知覚。

光のトンネルの実験→網膜像がないのに「面」が見える。

視覚は網膜を必要としない。多様な眼。

生態光学（エコロジカル・オプティクス）

情報は光の中にある。ただし、放射光ではなく包囲光に。

包囲光配列（ambient array）

「形」にではなく「変形」に意味がある。

変化しないことではなく、変化することで、対象の不変の性質——不変項（インバリアント）——が明らかになる。

■Motion Understanding

視覚は単純な静止した像ではなく、動きに意味を見いだす。

視覚のピラミッドの錯覚を破るには？ 動いてみればいい。

■メルロ＝ポンティ『眼と精神』

「画家はその身体を世界に貸すことによって、世界を絵に変える。」

「わたしの位置の移動はすべて、原則としてわたしの視野の一角に何らかの形で現れ、〈見えるもの〉の地図に描きこまれる。そして、わたしの見るすべてのものは、原則として私の射程内に、少なくともまなざしの射程内にあって、「私になしうる」ことの地図の上に定位されるのだ。この二つの地図はいずれも完全なものである。つまり、見える世界と私の運動的企投の世界とは、それぞれに同一の存在の全体を覆っているのだ。」

「謎は、私の身体が見るものであると同時に見えるものだという点にある。……この最初のパラドクスは、爾余のパラドクスを生み出さずにはいない。見えるものであり、動かされるものである私の身体は、物の一つに数え入れられ、一つの物である。私の身体は世界の織目の中に取り込まれており、その凝集力は物のそれなのだ。しかし、私の身体は自分で見たり動いたりもするのだから、自分の回りに物を集めるのだが、それらの物はいわば身体そのものの付属品か延長であって、その肉のうちに象嵌され、言葉のすべき意味での身体の一部をなしている。したがって、世界は、ほかならぬ身体という生地で仕立てられていることになるのだ。」

「だからこそセザンヌも「自然は内にある」と言うのだ。質、光、色彩、奥行といったものは、われわれの前に、そこにあるものではあるが、しかし我々の身体のうちに反響を喚び起こし、我々の身体がそれを迎え入れるからこそ、そこにあるのだ。」

「画家の視覚は、もはや外なるものに向けられた眼差し、つまり世界との単なる物理的光学的関係ではない。世界は、もはや画家の前に表象されてあるのではない。いわば見えるものが焦点を得、自己に到来することによって、むしろ画家のほうが物の間から生まれてくるのだ。」

「おそらく今や〈見る〉というこの小さな語の担うすべてが、以前よりいつそうよくわかるようになったことであろう。視覚は思考の様態とか自己への現前ではない。それは、私が私自身から不在となり、存在の裂開——私が私自身に閉じこもるのは、その極限においてでしかないのだ——に内側から立ち会うために贈られた手段なのである。」

参考文献

ダイアログ・イン・ザ・ダーク<<http://www.dialoginthedark.com/>>

Dobelle Institute <<http://www.artificialvision.com/index.html>>

Dobelle Eyeについての論文の和訳 <www.jarvi.org/resource/a_vision.txt>

佐々木正人『アフォーダンス——新しい認知の理論』岩波書店、岩波科学ライブラリー12、1994

Motion Understanding<<http://www.accad.ohio-state.edu/~asomasun/MotionUnderstanding/Motion.html>>

港千尋『第三の眼：デジタル時代の想像力』廣済堂、廣済堂ライブラリー002、2001

モーリス・メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1966

北岡明佳の錯視のページ<<http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/index-j.html>>